

「秘書」のイメージに関する研究

和田 美知子
藤田 主一
堀江 光

1. はじめに

秘書 (secretary) とは、「上司が本来の職務に専念できるように補佐する人⁽¹⁾」と定義されている。秘書専攻の学生が短期大学等で秘書の理論を学習する目的は、具体的な秘書業務を支える効率的な方法を獲得することにある。例えば、①秘書の役割や業務、②組織における秘書の形態、③秘書としての資質や能力、④秘書の人間関係⁽¹⁾などの学習がそれにあたる。しかし、今日のようないんぱん化の進んだ社会において、秘書に求められる役割が従来にも増して複雑多岐にわたることはいままでのない。秘書には、積極的で能動的な役割が求められているのである。

概論的な『秘書に求められるパーソナリティ』としては、次のようなものがある⁽¹⁾。

- (1) 機密を守ることのできる慎重さを持つこと。
- (2) 正確で、信頼される仕事ができること。
- (3) 勤勉に努力をすること。
- (4) 先見性を持って、つぎつぎと仕事を予見すること。
- (5) 臨機応変に柔軟な態度で色々な場面に対応できること。
- (6) 冷静・沈着しかも“SENSITIVE”であること。
- (7) 機転がきき、記憶力にすぐれていること。
- (8) 忠実で謙虚であること。

ところで、本学の経営学科にも秘書専攻があり、2年間、秘書専門科目をはじめとするさまざまな教育をして、卒業生を社会へ送り出している。そこで学んでいる学生たちが、どのようなパーソナリティを持ち、秘書についてどのようなイメージを持って入学し、また卒業していくのか。それに対して、秘書の専門教育がどのように影響しているのかを分析することは、教育する側にとっても重要なことであろう。

このような目的をもって、我々は、1992年度入学の経営学科秘書専攻学生を研究の対象とし、入学時、1年修了時、2年修了時の3回にわたって、同一の質問紙調査を実施した。また、統制群として、1992年度入学の他専攻（経営学科経営実務専攻、文学科日本文学専攻・英米文学専攻）の学生には入学時と2年修了時の2回、1991年度入学の秘書専攻学生には2年進級時と2年修了時の2回、1993年度入学の秘書専攻学生には入学時と1年修了時の2回、それぞれ同一の質問紙調査を実施した。質問票の問1は秘書についての自由記述、問2は秘書からイメージする形容詞対の評価、問3は秘書に職務上必要とされるパーソナリティ適性についての自己評価である。

また、これとは別に、1991年度入学の秘書専攻学生と、1992年度入学の他専攻学生の一部には、それぞれの2年次に矢田部・ギルフォード性格検査（Y-G性格検査）を実施した。

これらの調査の集計・分析結果は、文末の一覧表のように順次発表してきた。収集したデータの量と時間との制約から、1995年（平成7年）に報告書を刊行してからも我々は研究を続け、特に問1（秘書についての自由記述）の分析結果は、すべて1996年以降のものである（文末一覧表の(7), (10), (11)）。また、経営実務専攻の学生は、秘書関係の科目も選択できるので、統制群を文学科に限定して改めて処理・分析をやり直した。

本論は、各論でふれなかった事項も新たに加え、一連の研究の集大成として報告するものである。

2. 『矢田部・ギルフォード性格検査（Y-G性格検査）の結果』について

(1) 目的

秘書業務に携わる人には、専門知識や技術のほかに、「秘書」という職業に対する何らかの適性が必要なのではないと思われる。秘書を適性、特にパーソナリティ要件の観点から捉えた場合、秘書を目指す専攻学生のパーソナリティ構造を把握することが、教育上からも必要であろう。さらに、他専攻の学生のパーソナリティ構造と比較することによって、その特徴をより明確にできるものと思われる。

(2) 方法

1. 対象者：本学経営学科秘書専攻の2年生134名、本学他専攻の2年生121名である。
2. 手続き：上記学生全員に、Y-G性格検査一般用を実施した。検査は、秘書専攻2年生は1992年7月～9月、他専攻2年生は1993年5月～12月に、20名前後の集団ごとに行われた。

(3) 結果と考察

1. 12尺度について

Y-G性格検査は、12尺度（パーソナリティ特徴）によって構成されている。すなわち、

- (1) D尺度：抑うつ性……………陰気，悲観的気分，罪悪感の強い性質
- (2) C尺度：回帰性傾向……………著しい気分の変化，驚きやすい性質
- (3) I尺度：劣等感の強いこと……………自信の欠乏，自己の過小評価，不適応感が強い
- (4) N尺度：神経質……………心配性，神経質，ノイローゼ気味，傷つきやすい
- (5) O尺度：客観的でないこと……………空想的，過敏性，主観的
- (6) Co尺度：協調的でないこと ……不満が多い，人を信用しない性質
- (7) Ag尺度：愛想の悪いこと ……攻撃的，社会的活動性，但し強すぎると社会的不適応になりやすい
- (8) G尺度：一般的活動性……………活発な性質，身体を動かすことが好き
- (9) R尺度：のんきさ……………気がるな，のんきな，活発，衝動的な性質
- (10) T尺度：思考的外向……………熟慮的，瞑想的および反省的の反対傾向
- (11) A尺度：支配性……………社会的指導性，リーダーシップのある性質
- (12) S尺度：社会的外向……………对人的に外向的，社交的，社会的接触を好む性質

である。

それぞれの尺度は，0から20までの整数値をとる。秘書専攻と他専攻，それぞれの平均値と標準偏差を表1に，それに基づくプロフィールを図1に示した。尺度でいえば，Dが標準点2に，R，T，A，Sが標準点4に，その他はすべて標準点3に位置している。F-t検定の結果では，GとSに有意差の傾向（ともに， $0.05 < p < 0.1$ ）が見られるだけで，2群間の有意差はなかった。

したがって，Y-G性格検査の12尺度の観点から捉えた場合，得られた結果は学生一般のパーソナリティ像と考えられる。つまり，現代の女子学生は①抑うつ性が小さい，②のんきである，③思考的に外向である，④支配性が大きい，⑤社会的に外向である，というパーソナリティ傾向を持っている。

表1 Y-G性格検査の12尺度の平均値

専攻	尺度	D	C	I	N	O	Co	Ag	G	R	T	A	S
秘書	平均値	8.46	8.95	8.34	8.87	8.16	6.31	10.28	13.16	12.43	10.50	11.62	15.66
	標準偏差	5.61	4.94	4.95	4.77	4.20	3.77	4.05	3.95	4.36	4.44	4.38	3.83
他	平均値	8.22	9.03	8.31	8.36	7.40	6.07	10.04	12.26	12.11	10.64	11.26	14.78
	標準偏差	5.24	4.58	4.66	4.61	3.91	3.81	4.08	4.17	3.95	4.40	4.58	4.10

標準点 パーセント	1					2					3					4					5					標準点 パーセント	
	1	5	10	20	30	40	50	60	70	80	90	95	99	1	5	10	20	30	40	50	60	70	80	90	95		99
抑うつ性小	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	20	20	20	20	D	抑うつ性大
気分の変化小	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	20	20	20	20	C	気分の変化大
劣等感小	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	20	20	20	20	I	劣等感大
神経質でない	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	20	20	20	20	N	神経質的
客観的	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	20	20	20	20	O	主観的
協動的	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	20	20	20	20	Co	非協動的
攻撃的でない	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	20	20	20	20	Ag	攻撃的
非活動的	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	20	20	20	20	Ag	活動的
のんきでない	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	20	20	20	20	R	のんき
思考的内向	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	20	20	20	20	T	思考的外向
服従的	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	20	20	20	20	A	支配性大
社会的内向	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	20	20	20	20	S	社会的外向

— 秘書専攻 …… 文学科

図1 Y-G性格検査専攻別プロフィール

2. 系統値と判定型について

Y-G性格検査では、12尺度の値のプロフィールから、さらに系統値を計算し、パーソナリティの型を判定する。すなわち、5つの類型をそれぞれ典型、準型、混合型に細分して、15の型に分類するのである。表2は5つの類型の名称とその解釈について、また、表3は15の型の記号表示をまとめたものである。

各系統値は0から12までの整数値をとり、A+B+C=12, A+D+E=12になる。秘書専攻と他専攻、それぞれの系統値別平均値と標準偏差を表4に示した。両群ともD系統値の高いことが分かる。F-t検定の結果では、B系統値に有意な差が認められた ($t_0=1.98, p<0.05$)。

次に、15の型と5類型への分布比率をまとめたものが、表5である。両群間で5類型への出現率に有意差は存在しなかった ($\chi^2=9.24, df=4, 0.05<p<0.1$) が、B類型が秘書専攻学生に高く、D類型が他専攻学生に高い傾向にあった。

表2 Y-G性格検査プロフィールの型

典型	英語名 Type	型による名称	因子		
			情緒安定性	社会適応性	向性
A	Average	平均型	平均	平均	平均
B	Black List	右寄り型	不安定	不適応	外向
C	Calm	左寄り型	安定	適応	内向
D	Director	右下がり型	安定	適応または平均	外向
E	Eccentric	左下がり型	不安定	不適応または平均	内向

表3 15の型の記号表示

	A類型	B類型	C類型	D類型	E類型
典 型	A	B	C	D	E
準 型	A'	B'	C'	D'	E'
亜型（混合型）	A''	AB	AC	AD	AE

表4 Y-G性格検査の系統値の平均（標準偏差）

系 統	A	B	C	D	E
秘書専攻	4.40(2.15)	4.56(1.80)	3.04(2.22)	5.41(2.87)	2.19(2.06)
他 専 攻	4.70(2.02)	4.09(1.99)	3.21(2.06)	5.24(2.92)	2.06(1.92)

表5 Y-G性格検査の15の型の出現率（%）

型	A A' A''	B B' AB	C C' AC	D D' AD	E E' AE
秘書専攻	1.5 4.5 12.7	5.2 12.7 14.2	3.0 0.0 2.2	15.7 22.4 2.2	3.0 0.7 0.0
	18.7	32.1	5.2	40.3	3.7
他 専 攻	1.7 4.1 11.6	2.5 8.3 6.6	3.3 1.7 4.9	14.0 22.3 13.2	0.0 2.5 3.3
	17.4	17.4	9.8	49.6	5.8

以上のことから、秘書専攻学生は他専攻学生に比べて、情緒不安定で社会的に不適応の傾向があることが認められた。

3. 『秘書のパーソナリティ適性についての自己評価』について

(1) 目 的

『適材適所』という言葉があるように、職場に最適な人が働いていることは、職場における生産性の向上だけでなく、職場の活性化や働いている人たち相互の人間関係にとっても好ましい状況を構成する。適性という概念は、職業についていえば、特定の職業において成功する可能性である。近年では、能率性や能力的な側面ばかりでなく、性格や興味、人生観、意欲なども重視されるようになった。そこで、秘書専攻の学生は、自分自身がどの程度、秘書としてのパーソナリティ適性を持ち合わせていると思っているか、また、2年間の秘書専門教育の結果、学生自身のパーソナリティに変容が見られるかどうかについて検討する。

秘書の適性をアセスメントする項目については、森田・服部⁽²⁾に掲載されているリストを応用した。それは、Fulton, P. J. & Hanks, J. D. (1985) による秘書パーソナリティ・チェックリストで、秘書として身につけておくべきパーソナリティの自己診断用として開発されたものである。

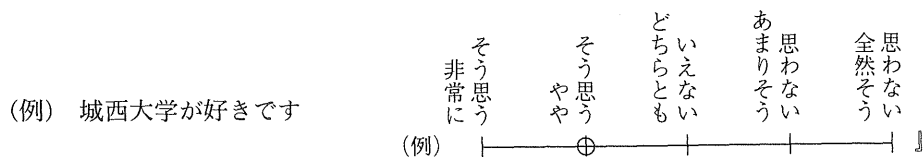
本研究では、リストに示された50項目の中から27項目を選択した。表現は項目形式に直し、回答は5件法とした。

(2) 方法

1. 対象者：1992年度に入学した、本学経営学科秘書専攻の学生120名、本学文学科の学生200名である。

2. 手続き：上記学生全員に、1992年4月に必修科目の最初の授業時と、1994年1月の必修科目の最後の授業時の計2回、同じ質問紙調査を集団で実施した。なお、秘書専攻の学生に対しては、1993年1月にも同じ調査を実施した。

調査票は、『下に、27種類の文章がならんでいます。それぞれの文章を読んで、あなた自身に一番当てはまるところに○印をつけてください。』



という教示の下に、27の文章を並べた形で示した。

(3) 結果と考察

1. 基本統計量について

回答の『非常にそう思う』から『全然そう思わない』までに、1から5までの整数を対応させて平均値を計算した。調査した5群（秘書専攻は3回、文学科は2回）の平均値を軸上にプロットしたものが、図2である。

専攻間の差を確認するために、それぞれの項目で平均のF-t検定を行った。その結果、有意差の認められた項目を表6に示した。入学時には過半数の項目に有意差が認められたが、卒業時にはその項目数が減り、「前向きな決意と忍耐を要する」項目に有意差が残っている点が特徴的である。有意差のあるいずれの項目においても、秘書専攻学生の方が肯定的である。特に全体を比較すると、4、5、6、8の4項目において標準偏差にも有意差があり、すべて秘書専攻学生の方にばらつきが小さい。学生本人の自己評価では、秘書専攻学生の方が秘書としてのパーソナリティ適性を持っているといえるようである。

次に、入学時と卒業時との差を調べた。それぞれについて、比率のカイ二乗検定と平均値のF-t検定を実施した結果、有意差が認められた項目を、表7にまとめた。表中の**印は1%水準で、*印は5%水準で、それぞれ有意差があることを示している。また、項目によってはカイ二乗検定において自由度が4にならないのは、度数が0になった選択肢があったことによる。まず専攻間を比較してみると、有意差のある項目が少ないことがわかる。秘書専攻の平均に有意差のある4項目をみても、「自制心」が育まれたほかは、「時間遵守」などの3項目がかえって否定する方へ変化している。この傾向は、文学科においてもみられる。



図2 群別平均値プロット

表6 専攻別の平均の検定結果

項 目	全 体	入学時	卒業時
1 人の名前を覚えるのが得意です		$t_0 = -2.13, *$	
2 初対面の人とでもすぐ知り合いになれます	$t_0 = -3.93, **$	$t_0 = -3.89, **$	
3 自制心があります			
4 明朗快活です	$t_0 = -3.58, **$	$t_0 = -3.02, **$	
5 任された仕事はどんなことがあっても誠心誠意やります	$t_0 = -5.99, **$	$t_0 = -4.80, **$	$t_0 = -3.35, **$
6 新しいことを学ぶのが好きです	$t_0 = -4.25, **$	$t_0 = -3.50, **$	$t_0 = -2.36, *$
7 待たされてもイライラしません	$t_0 = -4.26, **$	$t_0 = -3.37, **$	$t_0 = -2.65, **$
8 人が話しているときは注意深く聞きます	$t_0 = -2.62, **$		$t_0 = -2.09, *$
9 自分が正しいと思うことを主張できます			
10 余暇をうまく利用しています			
11 始業時間や約束の時間を守ります		$t_0 = -2.05, *$	
12 ユーモアのセンスがあります			
13 最後まで仕事をやりとおします	$t_0 = -4.16, **$	$t_0 = -2.95, **$	$t_0 = -2.92, **$
14 失敗してもめげずに頑張ります	$t_0 = -3.00, **$	$t_0 = -2.88, **$	
15 自分のことを話すのは控える方です			
16 少しぐらいのことでは落ち込まないタイプです			
17 言われなくても自分から進んで勉強します	$t_0 = -2.44, *$		
18 秘密を守れます	$t_0 = -3.12, **$	$t_0 = -2.46, *$	
19 冗談を冗談として受け取れます	$t_0 = -2.21, *$		$t_0 = -2.28, *$
20 他人の中に入って行くのが苦にならないです	$t_0 = -2.17, *$		
21 わからないことは質問します			
22 期待されている以上のことをやろうとします	$t_0 = -2.09, *$		
23 その場の状況を判断しながら自分の意見を言う方です			
24 約束したことは守りとおします	$t_0 = -3.29, **$	$t_0 = -2.57, *$	$t_0 = -2.09, *$
25 骨のおれる仕事でも快く引き受けます	$t_0 = -2.11, *$	$t_0 = -2.57, *$	
26 自分のあやまちを素直に認めて謝ります	$t_0 = -2.57, *$	$t_0 = -3.45, **$	
27 人に頼らないで自分で判断することができます	$t_0 = -2.23, *$	$t_0 = -2.23, *$	

* $p < 0.05$, ** $p < 0.01$

表7 入学時と卒業時の検定結果

項 目	全体 F-t 検定	秘書 χ^2 検定	秘書 F-t 検定	文学 χ^2 検定	文学 F-t 検定
1 人の名前を覚えるのが得意です		$\chi^2 = 11.89, df=4, *$			
2 初対面の人とでもすぐ知り合いになれます					$t_0 = 2.26, *$
3 自制心があります	$t_0 = 3.32, **$		$t_0 = 2.08, *$	$\chi^2 = 18.23, df=4, **$	$t_0 = 2.58, *$
6 新しいことを学ぶのが好きです	$t_0 = -2.48, *$	$\chi^2 = 8.54, df=3, *$	$t_0 = -2.27, *$		
11 始業時間や約束の時間を守ります	$t_0 = -4.63, **$	$\chi^2 = 14.10, df=3, **$	$t_0 = -3.89, **$	$\chi^2 = 10.44, df=4, *$	$t_0 = -2.91, **$
17 言われなくても自分から進んで勉強します				$\chi^2 = 11.52, df=4, *$	
26 自分のあやまちを素直に認めて謝ります		$\chi^2 = 9.33, df=3, *$	$t_0 = -2.23, *$		

* $p < 0.05$, ** $p < 0.01$

2. 因子分析の結果について

表8は、4群全体と個別に処理した因子分析の結果をまとめたものである。因子抽出は主因子法、因子回転はバリマックス法を用い、3因子を選択した。

まず、全体の結果を見ると、負荷量の高い項目から、因子Iは『外向性』、因子IIは『信頼性』、因子IIIは『やる気』と考えられる。また、因子得点をもとに、4群の平均の分散分析を行って見たところ、因子IIに1%水準、因子IIIに5%水準で、有意な差が認められた。しかし、秘書専攻の2群を別々に因子分析した結果では、ばらつきがあるようにもみえるが、基本的な構造自体に学年間で大きな差異があるとは思われない。そこで、因子Iは『外向性』、因子IIは仕事に対する『責任感』、因子IIIは『自己統制』とした。

以上の結果から、①秘書を専攻した学生は、秘書のパーソナリティ適性を相対的に持ち合わせて入学している、②2年間の秘書専門教育により、適性の向上が認められたとは言い難い、③秘書専攻の学生の考える秘書のパーソナリティ特性は3因子で説明されることが明らかになった。

表8 群別因子パターン

項 目	因 子 (負荷量)				
	全 体	秘書入学	秘書卒業	文学入学	文学卒業
1. 人の名前を覚えるのが得					
2. 初対面の人とでもすぐ知	I (.64)	I (.70)	I (.63)	III (.53) I (.44)	III (.63)
3. 自制心があります		II (.48)	II (.41)		II (.50)
4. 明朗快活です	I (.55)	I (.60)	I (.55)	I (.59)	III (.54)
5. 任された仕事はどんなこ	II (.50) III (.48)	III (.52)	II (.61)	II (.52) I (.41)	II (.57)
6. 新しいことを学ぶのが好	III (.49)	III (.43)	III (.66)		I (.55)
7. 待たされてもイライラし	II (.41)			II (.46)	
8. 人が話しているときは注	II (.44)	II (.53)	I (.45)		II (.43)
9. 自分が正しいと思うこと	III (.45)		I (.51)	I (.52)	I (.64)
10. 余暇をうまく利用してい		I (.47)	I (.44)		
11. 始業時間や約束の時間を	II (.42)		II (.54)		II (.48)
12. ユーモアのセンスがあり	I (.49)	I (.54)	I (.55)	I (.50)	I (.42) III (.40)
13. 最後まで仕事をやりとお	II (.54) III (.49)	II (.41) III (.48)	II (.65) III (.43)	II (.56) I (.46)	II (.63)
14. 失敗してもめげずに頑張	III (.41)	I (.46)		I (.52) II (.40)	I (.42)
15. 自分のことを話すのは控		II (.53)			
16. 少しぐらいのことでは落	I (.48)	I (.45)	I (.50)	III (.53)	III (.52)
17. 言われなくても自分から				I (.47)	
18. 秘密を守れます	II (.46)	II (.52)	II (.54)		
19. 冗談を冗談として受け取	I (.60)	I (.60)	I (.72)	III (.61)	III (.53)
20. 他人の中に入って行くの	I (.74)	I (.77)	I (.79)	III (.66)	III (.70)
21. わからないことは質問し		I (.50)	I (.44)	I (.41)	I (.47)
22. 期待されている以上のこ	III (.58)	III (.58)	III (.55)	I (.48)	I (.61)
23. その場の状況を判断しな			III (.41)	I (.42)	
24. 約束したことは守りとお	II (.52)		II (.60)	II (.47)	II (.49)
25. 骨のおれる仕事でも快く	III (.44)	III (.72)	III (.41)	II (.53)	II (.48)
26. 自分のあやまちを素直に		II (.44)	I (.45)	II (.50)	
27. 人に頼らないで自分で判		II (.62)		I (.47)	I (.45)

4. 『秘書からイメージする形容詞対の評価』について

(1) 目的

日本では、『秘書』に対するイメージを求められると、①書類を抱えてさっそうと歩く女性、②上司の仕事を陰で支える人、③機密・秘密を遵守する人、④こまめに世話をやく人などという答えが多くなる。日本では秘書を専門職として位置づける意識が諸外国と比較して低く、『秘書』と直接関わっていない人には、秘書の本当の仕事が見えにくい。

そこで、形容詞対の5段階評価によって、学生が持っている『秘書』のイメージを明らかにする。さらに、学年間、専攻間の比較により、秘書専門教育の影響を確認する。

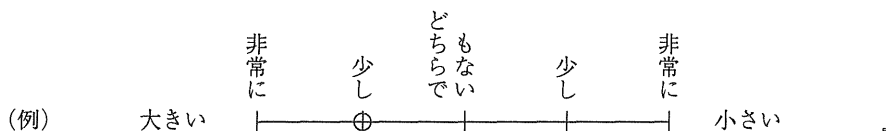
秘書イメージの測定には、SD法(Semantic Defferential Method; 意味微分法)を用いた。対象の形容詞は、井上・小林³⁾が示した40項目である。

(2) 方法

1. 対象者：1992年度に入学した、本学経営学科秘書専攻の学生120名、本学文学科の学生200名である。

2. 手続き：上記学生全員に、1992年4月の必修科目の最初の授業時と、1994年1月の必修科目の最後の授業時の計2回、同じ質問紙調査を集団で実施した。なお、秘書専攻の学生に対しては、1993年1月にも同じ調査を実施した。

調査票は、『下に、40個の形容詞が対比してなっています。「秘書」のイメージは、この対比した形容詞の、どの辺に位置するのでしょうか。(例)にならってその場所に○印をつけてください。』

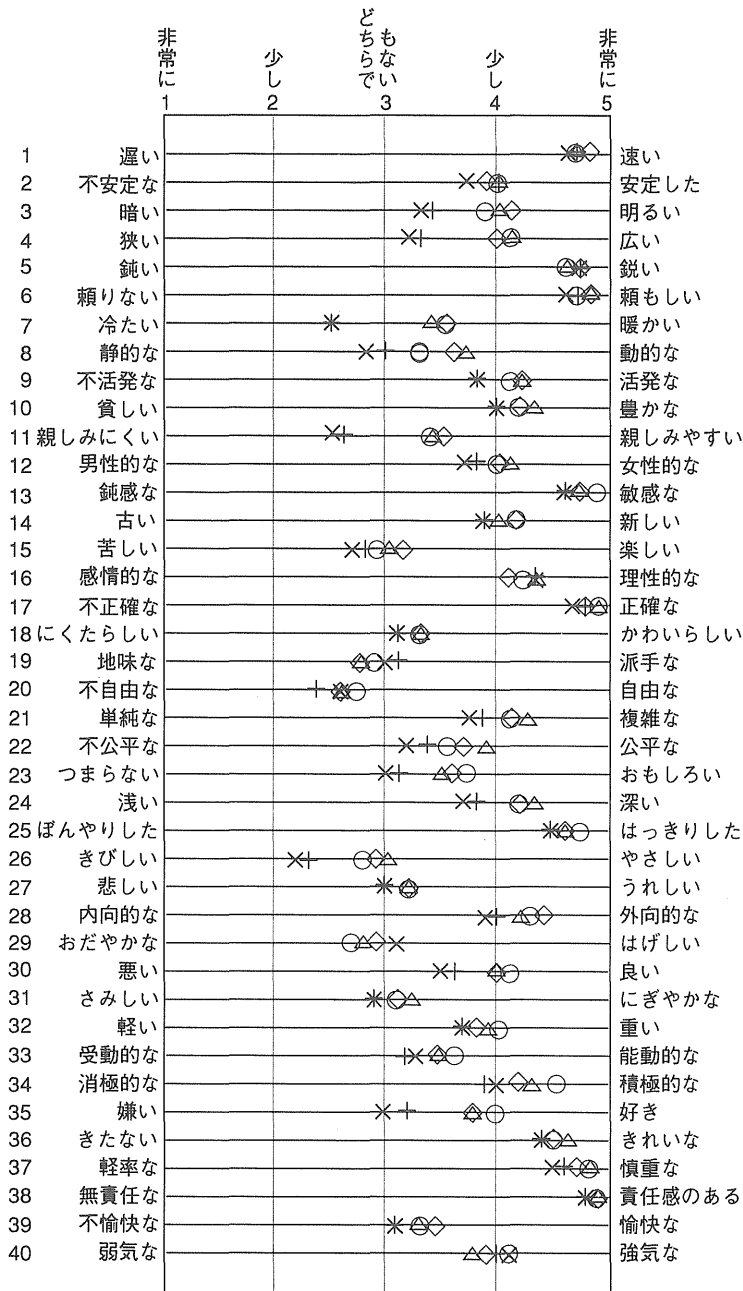


という教示の下に、40対の形容詞を並べた形で示した。

(3) 結果と考察

1. 基本統計量について

まず、回答の左の『非常に』から右の『非常に』までに、1から5までの整数を対応させて、平均値を計算した。調査した5群(秘書専攻は3回、文学科は2回)の平均値を軸上にプロットしたものが、図3である。



○秘書入学時 ◇秘書進級時 △秘書卒業時
×文学入学時 +文学卒業時

図3 群別平均値プロット

表9 専攻間の平均の差の検定結果

項目	全体	入学時	卒業時
1. 遅い—速い			
2. 不安定な—安定した		$t_0 = 2.18, *$	
3. 暗い—明るい	$t_0 = 7.78, **$	$t_0 = 5.68, **$	$t_0 = 5.00, **$
4. 狭い—広い	$t_0 = 10.48, **$	$t_0 = 7.42, **$	$t_0 = 7.38, **$
5. 鈍い—鋭い			
6. 頼りない—頼もしい	$t_0 = 3.81, **$	$t_0 = 2.46, *$	$t_0 = 2.59, *$
7. 冷たい—暖かい	$t_0 = 11.03, **$	$t_0 = 7.81, **$	$t_0 = 7.76, **$
8. 静的な—動的な	$t_0 = 5.39, **$	$t_0 = 3.06, **$	$t_0 = 4.69, **$
9. 不活発な—活発な	$t_0 = 5.63, **$	$t_0 = 3.49, **$	$t_0 = 4.12, **$
10. 貧しい—豊かな	$t_0 = 3.82, **$	$t_0 = 2.45, *$	$t_0 = 2.95, **$
11. 親しみにくい—親しみやすい	$t_0 = 9.51, **$	$t_0 = 6.86, **$	$t_0 = 6.59, **$
12. 男性的な—女性的な	$t_0 = 3.29, **$		$t_0 = 2.80, **$
13. 鈍感な—敏感な	$t_0 = 3.61, **$	$t_0 = 3.44, **$	
14. 古い—新しい	$t_0 = 2.29, *$		
15. 苦しい—楽しい	$t_0 = 2.74, **$	$t_0 = 2.04, *$	$t_0 = 1.98, *$
16. 感情的な—理性的な			
17. 不正確な—正確な	$t_0 = 3.66, **$	$t_0 = 2.92, **$	
18. にくたらしい—かわいらしい	$t_0 = 3.96, **$	$t_0 = 2.57, *$	$t_0 = 3.02, **$
19. 地味な—派手な	$t_0 = -2.41, *$		$t_0 = -2.58, *$
20. 不自由な—自由な	$t_0 = 2.56, *$		$t_0 = 2.05, *$
21. 単純な—複雑な	$t_0 = 4.30, **$	$t_0 = 2.88, **$	$t_0 = 2.99, **$
22. 不公平な—公平な	$t_0 = 6.20, **$	$t_0 = 3.90, **$	$t_0 = 5.13, **$
23. つまらない—おもしろい	$t_0 = 8.56, **$	$t_0 = 7.64, **$	$t_0 = 4.53, **$
24. 浅い—深い	$t_0 = 7.29, **$	$t_0 = 5.38, **$	$t_0 = 4.93, **$
25. ぼんやりした—はっきりした	$t_0 = 2.11, *$	$t_0 = 2.32, *$	
26. きびしい—やさしい	$t_0 = 6.77, **$	$t_0 = 4.63, **$	$t_0 = 5.44, **$
27. 悲しい—うれしい	$t_0 = 5.56, **$	$t_0 = 4.18, **$	$t_0 = 4.18, **$
28. 内向的な—外向的な	$t_0 = 4.71, **$	$t_0 = 3.72, **$	$t_0 = 2.63, **$
29. おだやかな—はげしい	$t_0 = -3.54, **$	$t_0 = -3.50, **$	
30. 悪い—良い	$t_0 = 7.19, **$	$t_0 = 5.68, **$	$t_0 = 4.48, **$
31. さみしい—にぎやかな	$t_0 = 4.52, **$	$t_0 = 2.72, **$	$t_0 = 3.65, **$
32. 軽い—重い	$t_0 = 3.82, **$	$t_0 = 2.97, **$	$t_0 = 2.44, *$
33. 受動的な—能動的な	$t_0 = 3.54, **$	$t_0 = 2.17, *$	$t_0 = 2.84, **$
34. 消極的な—積極的な	$t_0 = 6.12, **$	$t_0 = 4.73, **$	$t_0 = 3.45, **$
35. 嫌い—好き	$t_0 = 9.63, **$	$t_0 = 7.42, **$	$t_0 = 6.20, **$
36. きたない—きれいな	$t_0 = 2.57, *$		$t_0 = 2.43, *$
37. 軽率な—慎重な	$t_0 = 4.77, **$	$t_0 = 3.32, **$	$t_0 = 2.92, **$
38. 無責任な—責任感のある	$t_0 = 4.60, **$	$t_0 = 2.78, **$	$t_0 = 2.96, **$
39. 不愉快な—愉快的な	$t_0 = 4.03, **$	$t_0 = 3.12, **$	$t_0 = 3.00, **$
40. 弱気な—強気な	$t_0 = -2.04, *$		$t_0 = -2.77, **$

* $p < 0.05$, ** $p < 0.01$

専攻間で平均のF-t検定を行った結果、有意差の認められた項目を表9に示した。ほとんどの項目に有意差が認められた。有意差のある項目のうち、19, 29, 40だけは秘書専攻学生の方が左寄り、ほかの項目は秘書専攻学生の方が右寄りである。特に全体の比較では、多数の項目に標準偏差の有意差が認められた。3, 6, 9, 13, 17, 19, 21, 28, 34, 37, 38の項目では秘書専攻学生の方がばらつきが小さく、15, 22, 26, 27, 39ではその逆になる。

次に、入学時と卒業時との差を調べた。それぞれについて、比率のカイ二乗検定と平均値のF-t検定を実施した結果、有意差が認められた項目を、表10にまとめた。表中の**印は1%水準で、*印は5%水準で、それぞれ有意差があることを示している。また、項目によってはカイ二乗検定で自由度が4にならないのは、度数が0になった選択肢があったことによる。まず専攻間を比較してみると、有意差のある項目が少ないことが理解できる。秘書専攻の平均に有意差のある項目をみると、22が右、すなわち「公平」な方へ寄ったほかは、「弱気」、「嫌い」、「つまらない」など、すべて卒業時には左の形容詞へ寄っている。

表10 入学時と卒業時の検定結果

項目	全体F-t検定	秘書 χ^2 検定	秘書F-t検定	文学 χ^2 検定	文学F-t検定
1. 遅い - 速い	$t_0 = -2.62, **$				$t_0 = -2.35, *$
2. 不安定な - 安定した	$t_0 = -2.35, *$			$\chi^2 = 10.08, df=4, *$	$t_0 = -2.83, **$
3. 暗い - 明るい				$\chi^2 = 13.96, df=4, **$	
8. 静的な - 動的な	$t_0 = -2.85, **$		$t_0 = -2.51, *$		
13. 鈍感な - 敏感な		$\chi^2 = 6.41, df=2, *$	$t_0 = 2.04, *$		
22. 不公平な - 公平な	$t_0 = -3.26, **$	$\chi^2 = 13.04, df=4, *$	$t_0 = -2.98, **$	$\chi^2 = 12.31, df=4, *$	
23. つまらない - おもしろい			$t_0 = 2.05, *$		
29. おだやかな - はげしい		$\chi^2 = 10.33, df=4, *$			
34. 消極的な - 積極的な	$t_0 = 2.17, *$		$t_0 = 2.36, *$		
35. 嫌い - 好き	$t_0 = 2.05, *$		$t_0 = 2.30, *$		
40. 弱気な - 強気な	$t_0 = 2.40, *$	$\chi^2 = 10.15, df=3, *$	$t_0 = 3.10, **$		

* $p < 0.05$, ** $p < 0.01$

2. 因子分析の結果について

表11は、4群全体と、個別に処理した因子分析の結果をまとめたものである。因子抽出は主因子法、因子回転はバリマックス法を用い、5因子を選択した。全体で見ると、因子Iは『好感度』、因子IIは『信頼感』、因子IIIは『活動力』、因子IVは『親近感』、因子Vは『重圧感』の因子といえそうである。因子得点をもとにした4群間の分散分析の結果は、5因子のすべてに1%未満の危険率で有意差があった。個々の因子分析では、秘書専攻入学時の因子Iは『親近感と期待度』の因子、秘書専攻卒業時の因子Iは『秘書の基本的資質』の因子となる。

項目ごとの平均からも言えることだが、入学した時点で抱いていた「あこがれ」としての秘書イメージが、2年間の教育によって、良いことも悪いことも具体的なイメージとして再構築された結果を示していると思われる。

表11 群別因子パターン

項 目	因 子 (負荷量)				
	全 体	秘書入学	秘書卒業	文学入学	文学卒業
1. 遅い—速い			I (.57)	II (.42)	
2. 不安定—安定した			IV (.41)		
3. 暗い—明るい	IV (.45)	I (.48)	III (.45)	III (.44)	V (.53) I (.44)
4. 狭い—広い			III (.43)		
5. 鈍い—鋭い	II (.45)			II (.47)	II (.51)
6. 頼りない—頼もしい	II (.52)	IV (.44)	I (.62)	II (.46)	II (.55)
7. 冷たい—暖かい	IV (.70)	I (.68)	IV (.60)	III (.82)	I (.76)
8. 静的な—動的な	III (.59)	III (.43)	III (.65)	I (.52)	III (.51)
9. 不活発な—活発な	III (.69)	III (.59)	III (.70)	I (.70)	III (.64)
10. 貧しい—豊かな			I (.41)		IV (.46)
11. 親しみにくい—親しみやすい	IV (.65)	I (.81)	IV (.54)	III (.69)	I (.67)
12. 男性的な—女性的な		I (.40)			I (.42)
13. 鈍感な—敏感な	II (.55)		I (.56)	II (.56)	II (.50)
14. 古い—新しい					IV (.42)
15. 苦しい—楽しい	I (.53)	II (.61)	II (.53)	V (.46)	I (.58)
16. 感情的な—理性的な	II (.40)			II (.53)	II (.46)
17. 不正確な—正確な	II (.48)		I (.65)	II (.51)	II (.50)
18. にくたらしい—かわいらしい	I (.54)	I (.59)	II (.58)	IV (.53)	I (.58)
19. 地味な—派手な	V (.51)	II (.47)			IV (.48) V (.46)
20. 不自由な—自由な	I (.43)	II (.51)		V (.40)	
21. 単純な—複雑な		V (.55)	I (.48)		
22. 不公平な—公平な					
23. つまらない—おもしろい	I (.53)	II (.52)	II (.54)	IV (.57)	
24. 浅い—深い		V (.73)	I (.43)		
25. ぼんやりした—はっきりした	II (.51)		I (.63)		II (.51)
26. きびしい—やさしい	IV (.55) I (.41)	I (.62)	IV (.47)	III (.54)	I (.67)
27. 悲しい—うれしい	I (.50)	II (.46) I (.43)	II (.59)	V (.47)	I (.46)
28. 内向的な—外向的な	III (.51)	III (.51)	V (.42)	I (.50)	III (.55)
29. おだやかな—はげしい	IV (-.46)	I (-.43) III (.41)	V (.53)	I (.43)	I (-.42)
30. 悪い—良い	I (.55)		II (.53)	IV (.40)	I (.49)
31. さみしい—にぎやかな		I (.45)	II (.45)	IV (.56)	III (.41)
32. 軽い—重い	V (-.52)	V (.51)	I (.48)		V (-.43)
33. 受動的な—能動的な	III (.43)			I (.44)	III (.50)
34. 消極的な—積極的な	III (.62)	III (.58)	III (.57)	I (.70)	III (.66)
35. 嫌い—好き	I (.65)	II (.51)	II (.64)	IV (.59)	I (.58)
36. きたない—きれいな		IV (.46)			IV (.45)
37. 軽率な—慎重な	II (.50)	IV (.51)	I (.51)	II (.48)	II (.49)
38. 無責任な—責任感のある	II (.49)	IV (.55)	I (.51)	II (.45)	II (.52)
39. 不愉快な—愉快的な	I (.56)	I (.43)	II (.54)	IV (.55)	I (.53)
40. 弱気な—強気な	IV (-.41)	III (.44)	V (.48)	I (.44)	IV (.41)

5. 『秘書についての自由記述』について

(1) 目的

秘書専門教育を求めて入学する秘書専攻の学生は、入学時においてすでに「秘書」という職業について何らかのイメージを抱いていると思われる。それは、入学後に学習する秘書理論や、マスメディアなどから得られる秘書の直接的・間接的情報によって、秘書の体系化とそのイメージがさらに膨らんでくると考えられる。「秘書」に対するイメージは、秘書教育を受けていくなかで変容する可能性があり、それが秘書適性を形成する基礎概念と考えられよう。

ここでは「秘書」という言葉から、あるいは「秘書職」という職務内容から得られるイメージが具体的にどう表現されるのか、また、短大における2年間の秘書専門教育はどのような影響を及ぼすのかを検討する。

秘書イメージをアセスメントするための方法は、Kuhn, M. の創始した20答法 (Twenty Statement Test) を参考にした。20答法は、本来、個人の自己意識や自己概念を測定するための方法として開発されたものであり⁽⁴⁾、「私は」という言葉に続いて20通りの異なる答えを書いてもらうことで、自己に関する多様な側面を分析しようとする。本研究では、この20答法の枠組みを応用して、「秘書は」の後に、20通りの異なる記述を求めることにした。

(2) 方法

1. 対象者：1992年度に入学した、本学経営学科秘書専攻の学生、本学文学科の学生である。
2. 手続き：上記学生全員に、1992年4月の必修科目の最初の授業時と、1994年1月の必修科目の最後の授業時の計2回、同じ質問紙調査を集団で実施した。

調査票の教示は、『あなたは、「秘書」についてどんなイメージを持っていますか。

下に、「秘書は ___」ということばが20個ならんでいます。その後に続けて、なるべく20通りの“ことばや文章”を自由に書いてください。

1. 秘書は _____
- ⋮
- ⋮
20. 秘書は _____

上に書いた20通りの「秘書は___」の中で、「秘書」の特性を一番よく表していると思う数字に1つ○印をつけてください。反対に、「秘書」の特性をそれほどよく表しているとはいえない数字に1つ×印をつけてください。』というものである。

回答欄には20通りの記述を求めたが、記述量に差が見られたため、10通り以上記述した者について集計した。秘書専攻の学生は、2回の調査とも共通の113名、統制群となる文学科の学生は、

共通の学生が多いものの、入学時が141名、卒業時が203名である。

(3) 結果と考察

1. 記述内容の5大分類, 15項目について

記述された内容を5種類に大分類し, それらをさらに3つずつ, 計15項目に細分化して分析を試みた。すなわち, 次のとおりである。

(1) 秘書職の概要 (Secretary Work; Sw)

Sw₁ : 秘書職の意義……専門職, 責任ある仕事, 大切な仕事, 等。

Sw₂ : 秘書の対人関係……上司との関係 (指示, 命令), 等。

Sw₃ : 秘書の日常業務……電話, コピー, お茶くみ, 接待, 雑務, 等。

(2) 秘書職務上の態度 (Secretary Behavior; Sb)

Sb₁ : 機密保持……秘密を守る, 口が堅い, 等。

Sb₂ : 機敏性……きばき, 臨機応変, 機敏, 素早い行動, 等。

Sb₃ : 責任感……責任, 正確, 礼儀作法, 信頼, 等。

(3) 秘書個人の性格特性 (Secretary Character; Ch)

Ch₁ : 温かさ……明るい, おしとやか, やさしい, 等。

Ch₂ : 冷たさ……暗い, 冷たい, クール, 等。

Ch₃ : 感情……笑う, 泣く, 怒る, 喜ぶ, 等。

(4) 秘書個人の能力 (Secretary Ability; Sa)

Sa₁ : 教養・知識……一般的常識・知識, 自分の意見を持つ, 等。

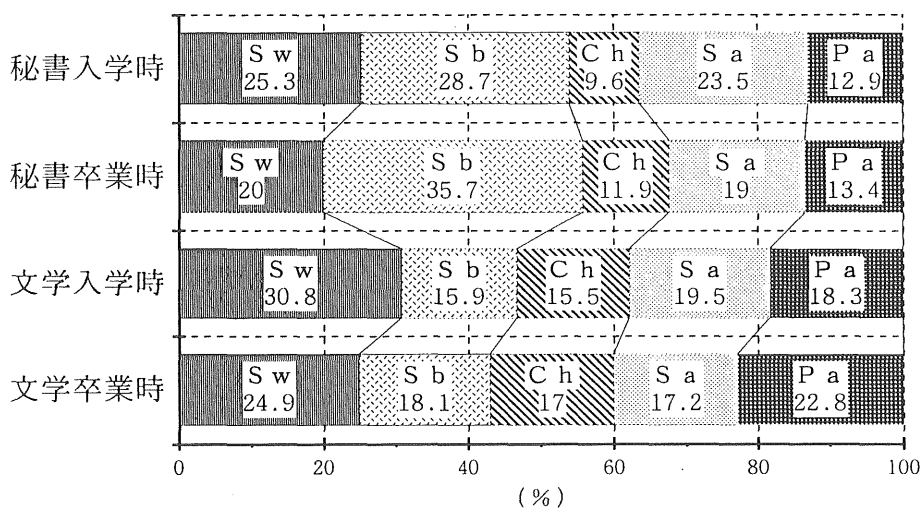


図4 5大分類の出現率の比較

Sa₂ : 知性……………有能, 記憶力, 頭がきれる, 頭の回転, 等。

Sa₃ : 特殊技能……………語学力, 字がきれい, ワープロ, 情報管理, 等。

(5) 秘書個人の外見的属性(Personal Appearance; Pa)

Pa₁ : 容姿……………美人, きれい, スタイル, 細身, 髪型, 清潔, おしゃれ, 等。

Pa₂ : 服飾……………服装, 洋服, めがね, 等。

Pa₃ : 年齢・性別……………女性, 若い, 等。

まず, 専攻・時期の異なる4群別に, 5つの大分類の出現率を比較したものが, 図4である。これを見ると, 比率が最も高かったのは, 秘書専攻学生では2回ともSb(秘書職務上の態度)であり, 文学科学生では2回ともSw(秘書職の概要)であった。出現率については, カイ二乗検定の結果, 実施時期の間, 専攻間のいずれにも有意な差が認められた($p < 0.01$)。

表12は, 専攻・時期の異なる4群別に, 15項目の出現率の結果をまとめたものである。秘書専攻学生では, 2回ともSw₁(秘書職の意義), Sb₂(機敏性), Sb₃(責任感)の出現率が高く, 文学科学生では, Sw₁(秘書職の意義), Pa₂(容姿), Ch₁(温かさ)の出現率が高い。これらの出現率には, カイ二乗検定の結果, 実施時期の間, 専攻間のいずれにも有意な差があった($p < 0.01$)。

さらにCR値(臨界比)を求めて検定した。その結果を表12の右半分に示した。秘書専攻学生

表12 専攻別, 時期別4群の秘書イメージの記述内容(%)

大分類	項目	秘書専攻の学生		文学科の学生		CR検定			
		①入学時	②卒業時	③入学時	④卒業時	①×②	③×④	①×③	②×④
Sw	Sw ₁	19.4	14.2	24.7	17.6	3.98**	6.08**	3.86**	3.01**
	Sw ₂	4.0	4.1	3.1	5.1	0.11	3.42**	1.53	1.55
	Sw ₃	2.0	1.7	3.1	2.2	0.67	1.88	2.01*	1.21
Sb	Sb ₁	2.2	5.2	2.1	2.3	4.50**	0.49	0.31	5.29**
	Sb ₂	13.1	15.0	5.1	6.9	1.57	2.62**	8.46**	8.90**
	Sb ₃	13.3	15.5	8.7	8.9	1.78	0.14	4.44**	6.95**
Ch	Ch ₁	6.8	8.3	9.7	11.2	1.69	1.64	3.19**	3.15**
	Ch ₂	1.7	2.2	4.8	4.6	1.08	0.31	5.13**	4.17**
	Ch ₃	1.1	1.3	0.9	1.2	0.66	0.94	0.52	0.41
Sa	Sa ₁	6.1	4.4	2.4	3.1	2.20*	1.53	5.62**	2.29*
	Sa ₂	7.7	8.7	9.3	9.2	1.04	0.17	1.70	0.53
	Sa ₃	9.7	5.9	7.8	4.9	4.14**	4.07**	2.07*	1.40
Pa	Pa ₁	8.7	11.0	10.9	12.2	2.28*	1.38	2.26*	1.23
	Pa ₂	1.7	1.1	4.7	7.5	1.62	3.96**	5.00**	9.65**
	Pa ₃	2.5	1.4	2.7	3.1	2.29*	0.75	0.41	3.56**

* $p < 0.05$, ** $p < 0.01$

の2回の結果から危険率1%未満で有意差のあった項目を見ると、 Sw_1 （秘書職の意義）と Sa_3 （特殊技能）が減少し、 Sb_1 （機密保持）が増加した。また専攻間の比較では、入学時よりも卒業時の方に有意差のある項目が増えている。特に Sb_1 （機密保持）は秘書専攻が有意に高く、 Pa_3 （年齢・性別）は秘書専攻が有意に低くなった。

2. 肯定的イメージと否定的イメージ

○印をつけられた項目について、専攻・時期の異なる4群別に、5つの大分類の出現率を比較したものを図5に、×印について同様に比較したものを図6に示した。

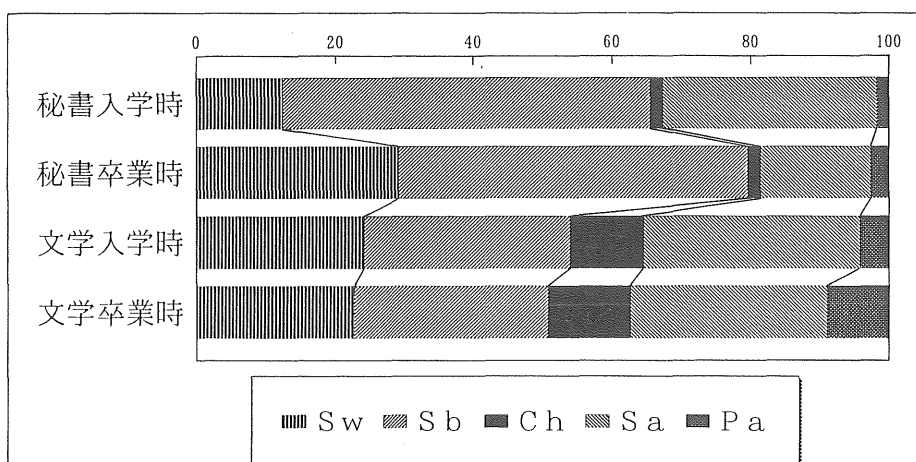


図5 肯定的イメージ（○印の項目）

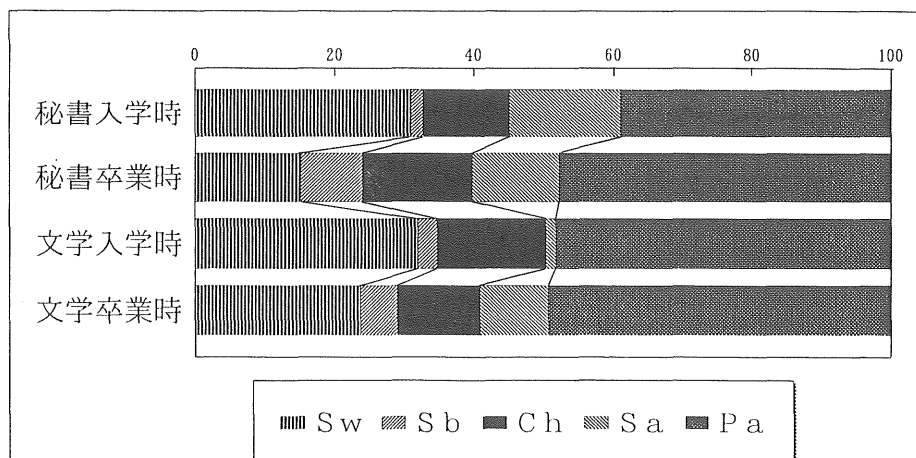


図6 否定的イメージ（×印の項目）

○印をつけられた項目、すなわち秘書の特性を示していると最も多く支持されたのは、秘書専攻では2回とも圧倒的にSb(秘書職務上の態度)である。これは、文学科には見られない結果である。また、逆にCh(秘書個人の性格特性)は、秘書専攻では少なく、文学科に多くなっている。秘書専攻の入学時と卒業時の比較では、Sw(秘書職の概要)が増加し、Sa(秘書個人の能力)が減少している。

短大の秘書教育は、接遇、文書管理や企業実習などの実務的なものと、秘書理論や事例研究などの講義から成っている。今回の調査で、秘書専攻の学生は、文学科の学生に比べて、入学時から秘書を職業として意識しているため、より具体的な秘書のイメージを持ち、卒業までにさらにその傾向を強くしていることがわかった。特に『秘書職務上の態度』の中の「機敏性」と「責任感」については、秘書を目指す学生が入学以前に知識として獲得している可能性を示しており、「機密保持」もまた卒業までに有意に強く認識されるようになる。これは、2年間の秘書教育によって習得しなければならない現実的な課題が一層鮮明になったためと考えられる。またこのことは、秘書教育を受けていない文学科の学生のイメージが概念的な『秘書職の意義』や『秘書個人の外見や性格』などの項目に集まっていることからもうかがえる。

6. おわりに

本論のはじめに述べたように、この一連の研究は、秘書の専門教育がどのような形で学生の身につについていくのかを分析することであり、それは教育する側にとって意義があるのではないかと考えたことに由来する。秘書としての適性、あるいは秘書に対するイメージを手がかりに、調査・分析してきた成果を、ここで改めて簡単にまとめて述べておきたい。

まず、秘書専攻の学生のパーソナリティ構造を把握するために、Y-G性格検査を実施した。その12尺度の観点から捉えた場合、得られた結果には専攻間の差がなく、学生一般のパーソナリティ像と考えられる。つまり、現代の女子学生は抑うつ性が小さく、のんきで、支配性が大きく、思考的にも社会的にも外向的である、というパーソナリティ傾向を持っている。ただし、5類型から見た場合は、秘書専攻学生は文学科の学生に比べて、情緒不安定で社会的に不適應の傾向があることが認められた。

次に、秘書のパーソナリティ適性を学生本人に5件法で自己評価させた。その結果、①秘書を専攻した学生は、秘書のパーソナリティ適性を相対的に持ち合わせて入学している。②2年間の秘書の専門教育によって、適性の向上が認められたとは言い難い。③秘書専攻の学生が考える秘書のパーソナリティ特性は、外向性、責任感、自己統制の3因子で説明される。

さらに形容詞対の評価から、学生が持っている秘書のイメージをSD法により検討した。秘書専攻の学生と文学科の学生との間で、ほとんどの項目に有意差が見られ、秘書専攻学生の方が明

るイメージで捉えている。秘書専攻学生の入学時と卒業時の違いは、入学した時点で抱いていたあこがれとしての秘書イメージが、2年間の教育によって、良いことも悪いことも具体的なイメージとして再構築されたことである。また、秘書入学時の第1因子は「親近感」と「期待度」、秘書卒業時の第1因子は「秘書の基本的資質」である。

最後に、20答法を応用した秘書についての自由記述の結果から、文学科の学生に比べて、秘書専攻学生は入学時からかなり具体的な秘書のイメージを持ち、卒業までにさらにその傾向を強くしていることがわかった。特に強く認識されるようになるのは、「機密保持」である。これは、2年間の秘書教育によって習得しなければならない現実的な課題が一層鮮明になったためと考えられる。

以上で、平成4年度城西大学研究奨励金交付に伴う研究『「秘書」イメージに関する発達の研究』についての全研究成果の公表を終えることにする。

<引用文献>

- (1) 全国短期大学秘書教育協会・編：『秘書学概論』。紀伊國屋書店、1988。
- (2) 森田義宏・服部美樹子：『秘書適性の研究（I）—秘書職志望とパーソナリティの関係—』。梅花短期大学紀要、38、1990。
- (3) 井上正明・小林利宣：『日本におけるSD法による研究分野とその形容詞対尺度構成の概観』。教育心理学研究、33、3、1985。
- (4) 星野 命：『20答法』。詫摩武俊（監修）、パッケージ・性格の心理6、ブレン出版、1986。

平成4年度城西大学研究奨励金交付に伴う研究成果一覧

「秘書」イメージに関する発達的研究

- (1) 和田美知子・藤田主一・堀江 光：『秘書専攻学生のパーソナリティ構造について
——特に、Y-G性格検査に基づいて——』……………秘書学研究誌，9，1993.
- (2) 和田美知子・藤田主一・堀江 光：『秘書適性と教育の効果に関する研究』
……………城西大学女子短期大学部紀要，11-1，1994.
- (3) 藤田主一・和田美知子・堀江 光：『秘書教育による秘書イメージの変容について』
……………城西大学女子短期大学部紀要，11-1，1994.
- (4) 藤田主一・和田美知子・堀江 光：『秘書専攻学生のパーソナリティ構造について（Ⅱ）
——特に，専攻間の比較を中心に——』……………秘書学研究誌，10，1994.
- (5) 和田美知子・藤田主一・堀江 光：『秘書におけるパーソナリティ適性と
教育の効果との関係について』……………城西大学女子短期大学部紀要，12-1，1995.
- (6) 藤田主一・和田美知子・堀江 光：『秘書のパーソナリティ適性と教育の効果
——特に，秘書専攻学生の心理構造について——』
……………平成4年度城西大学研究奨励金交付に伴う研究成果報告書，1995.
- (7) 和田美知子・藤田主一・堀江 光：『秘書の肯定的イメージと否定的イメージ』
……………城西大学女子短期大学部紀要，13-1，1996.
- (8) 藤田主一・和田美知子・堀江 光：『「秘書」イメージの測定と方向性』
……………秘書学経営実務研究誌，11，1996.
- (9) 和田美知子：『秘書のイメージと教育との関係について』
……………日本応用心理学会第63回大会，1996.
- (10) 藤田主一・和田美知子・堀江 光：『秘書教育が秘書イメージに及ぼす効果』
……………秘書学経営実務研究誌，12，1997.
- (11) 和田美知子：『秘書イメージに及ぼす教育の影響』
……………日本応用心理学会第64回大会，1997.
- (12) 和田美知子・藤田主一・堀江 光：『「秘書」のイメージに関する研究』
……………城西大学女子短期大学部紀要，15-1，1998.